# 1930年代における
# オーデンのヒロイズムの探究

高　野　正　夫

## (1)

イギリスの1920年代は，国民的英雄のいない時代であり，真に英雄的な行為がどのようなものであるか忘れられていた。それというのも，第一次世界大戦という新しい科学兵器を使った近代的な戦いが，イギリス人の考えていた，戦場における伝統的なヒロイズムの理想を破壊してしまっていたからであった。いわゆる指導者としてのヒーローのいない時代に，大学を出て世界的な不況の波にのみ込まれていったオーデンのような若い世代の詩人や作家たちにとっては，厳しい現実においてばかりでなく創作においても，同世代の若者たちの精神的な拠り所となるような，新しいヒーローが必要であったのである。

オーデンが，オックスフォードのクライスト・チャーチ・カレッジに入学したのは，1925年の秋であった。20年代のオックスフォードが，どのような雰囲気のなかにあったかは，オーデンと同時代の作家や詩人たちによって語られているが，それは全く現実の俗世間とはかけ離れた一種のアルカディアであったかもしれない。そして，すべての理想郷につきもののデカダン的な空気に満ちあふれ，上流階級の裕福な家柄の出である学生たちは，思い思いにきらびやかな大学生活を楽しんでいた。社交的なパーティーに，美学や哲学そして心理学のようなアカデミックな研究に，またスポーツにと，オックスフォードの学生たちは，一般の人々からは想像もつかないほどの自由な世界に生きていたのである。

そこは，「鏡のむこうに」('Through the Looking-Glass') のなかで，オーデン自身が描いたような不思議の国であったのかもしれない。

Your portrait hangs before me on the wall,

And there what view I wish for I shall find,
The wooded or the stony, though not all
The painter's gifts can make its flatness round;
Through each blue iris greet the heaven of failures,
That mirror world where Logic is reversed,
Where age becomes the handsome child at last,
The glass wave parted for the country sailors.

君の肖像画が僕の前で壁にかかっている。
そこでは僕の望むどんな風景も見つかるだろう。
木の生い茂った風景や石だらけの風景も。けれども画家の
すべての才能をもってしても，その平坦さを丸くできるわけではない。
それぞれの青い虹彩のむこうに，失敗の天国が現れる。
論理が逆転したあの鏡の世界が。
そこに住む老人は，最後には美しい子供となり，
ガラスの波は，田舎の水夫たちのために分かれた。

オーデンの詩において鏡は，人間の現実からの逃避を象徴するものであるが，オーデンが青春を過ごしたオックスフォードを映す鏡も，やはり現実の世界を逆さまに見せてくれるものであった。現実の世界を組み立てている論理が，弱々しく崩壊したこの夢の世界で，彼は自らの「愛の白昼の王国」に気ままな思いを巡らしていた。

当時を思い起こしながら，オーデン自身が述べているように，「20年代のオックスフォードは実に軽薄だった。」(1) のである。学生たちにとって人生は安定したものであり，世界は変わることなく，いつまでも同じように回り続けていくように思われた。彼らはあまりにも世間から孤立し，自分自身のことに夢中になっていたため，外の現実の世界では，ヨーロッパでは，どんなことが進行しつつあったのかさえ知らなかったのである。1926年の5月に，炭鉱労働者たちを支援して，イギリスの600万人の労働組合員のほぼ半数がゼネストに突入したときに，TUC を支持して政治的な活動を行なったこともあるオーデンでさえ，「1930年以前は，決して新聞を開くこともなかった。」(2) のである。

英文学を専門に研究する意図もなかったオーデンは，ただ広範囲にわたって英文学や心理学の本を読みふけっていた。そして，友人たちの問題を解決したり，彼らの精神的な悩みについての相談に多くの時間を費やしたりして，専門の勉強のほうは全く顧みることもなかった。そのためか，自然科学

を専攻とし，奨学金を与えられ，きわめて優秀な学生としてオックスフォードに入学したオーデンではあったが，1928年の6月に卒業したときには，両親をがっかりさせるような成績であったのである。しかし，1922年の3月のある日曜の午後に，後に画家となった，グレシャムズ・スクールの友人，ロバート・メドレーにすすめられて詩を書き始めてから，オーデンは詩人として生きていくことを決意していたのだった。立派な成績を取ることよりも，偉大な詩を書くことに熱中していたオーデンは，たくさんの詩を書いては友人たちに朗読して聞かせたりしていた。

このように，オーデンはすでにオックスフォード時代に，自らが進んで行く道をはっきりと認識していたのである。しかし，暖かな居心地の良い温室のような当時のオックスフォードで，それを探し出すことはできなかったのである。彼自身，「オックスフォードでそれを見つけることは無理だろうし，そこに留まっている限り，僕は子供のままでいるだろう。」(8) と自らの状況を的確に捉えていたのだった。そして，この言葉通りにオーデンは，オックスフォードを卒業すると，次々にさまざまな試みによる独自の作品を発表していった。

(2)

世間とは全くかけ離れた自由な，デカダンな雰囲気のなかから，厳しい現実の社会に飛び出したオーデンが，最初に試練を味わったのは，自らの処女詩集を出版するときであった。学生時代にエリオットのフェイバー社に詩集を送って，出版を断わられたことのあるオーデンは，その後さまざまな出版社にも拒絶されていた。しかし，1929年の秋に再びフェイバー社に送った『双方の報い』(*Paid on Both Sides*) が認められて，やっとオーデンはイギリスの文壇にわずかながらその名を知られるようになったのである。

大学を卒業してから2年間仕事につくこともなかったオーデンは，1930年の秋には，スコットランドのヘレンズバーグでやっと教師の職を見つけていた。そして，1935年の9月に GPO の映画部に移るためロンドンに行くまで，教師をしながら多くの作品を発表していった。大不況のなかにあって仕事を得られたことは，オーデンにとってはきわめて幸運なことであっただろう。それというのも，1931年頃のイギリスでは，経済的な不況がますます深刻になってきて，その年の終わり頃には，250万人以上もの人々が職を失っ

ていたからであった。このような「灰色で薄汚い時代」にありながら，オーデンは着々と自らの詩的野望を果たそうとしていた。

一方，「輝やける若者たち」と呼ばれたオーデンと同世代の若者たちは，30年代に入ると，社会のさまざまな分野で活躍の場を求めて，独自の主張を表現しようとしていた。しかし，彼らから見たイギリスの社会は病んだ状態にあったのである。エリオットが『荒地』(*The Waste Land*) において，画期的な技法と，哲学的で懐疑的なペシミズムによって20年代の若者たちに予言した[4]，西欧文明の終末がより間近に迫って来たかのような荒涼としたカオスの時代に，新しい30年代の若者たちは生きていた。そして，彼らは20年代の若者たちが抱いていた，あの第一次世界大戦後の一種の無気力な精神をそのまま受け継いでいたのである。つまり，それはリチャーズが，「荒廃感，不安定感，空虚感，拠り所のない願望や，むなしい努力を抱いた感じ」と表現した[5]，どうにも救いようのない気分であった。

更に，それはまた，オーデンが「死のこだま」('Death's Echo') において，死神に言わせた言葉に象徴されるような時代でもあった。

Father, grandfather stood upon this land,
And here the pilgrims from our loins will stand.'
　So farmer and fisherman say
　In their fortunate hey-day:
　But Death's low answer drifts across
　Empty catch or harvest loss
　　Or an unlucky May.
*The earth is an oyster with nothing inside it,*
　*Not to be born is the best for man;*
*The end of toil is a bailiff's order,*
　*Throw down the mattock and dance while you can.*

父や祖父はこの地に立った。
われわれから生まれる巡礼者たちもここに立つだろう。」
　こんな風に農夫や漁師は言う
　幸運な絶頂のときに。
　しかし，死の低い答えが漂い流れてくる。
　不漁や収穫の損害，
　　不運な五月をおおい。
地球は中身がからのカキ，
　生まれないことが，人間にとって一番いいことだ。

つらい仕事の終わりが管理人の命令さ，
　つるはしを投げすてて，踊れるうちに踊るがいい。

全く虚無的な雰囲気のなかで，若者たちは信ずるものも持たずに人生をあてもなく生きていた。まるであの「最後の審判の日」が身近かに迫ってきたかのように，刹那的に自らの運命を捉えていたのだ。すべてを投げすてて束の間の快楽に身を任せることによって，人生の苦しみを忘れようとする，きわめて否定的な生き方が若者たちを支配していたのである。

脱け出しようのない「危機と失意の時代」にあって，自らの存在意義を見失い，職につくこともできなかった多くの若者は，いわばパーティーに行くことで時をやり過ごしていたのだった。人生に生きがいを見出すことのできなかった彼らにとっては，この世のすべてが「にせもの（ボウガス）」に見えたし，自らの存在でさえも「にせもの」であったに違いない。

大義を喪失した，すべてのものが虚無感におおわれていたイギリスという国，そして世界全体が，「にせもの」という彼らの共通の言葉で表現されていた。しかし，このような彼らの深遠な絶望感の背後には，新しい時代を自分たちの手で作り変えていこうという，若者らしい理想が秘められていたのである。彼らのどこにもぶつけることのできない無力感は，強ければ強いほど，それが新たな正しい目標を見つけ出したときには，より大きなエネルギーとなって，30年代という疾風怒濤の時代を駆け抜けていくことは確かであった。

更に，この荒廃した気分で 30 年代を迎えた若者たちにとって，社会的要因の他にもうひとつ彼らの存在意義を，捉えようのない虚しい状況に追いやっていたものがあった。それは，彼らの父や先輩たちに対する一種のコンプレックスのようなものであった。

30年代に活躍したオーデン・グループの詩人や作家たちは，ほとんどが上流の子弟の出であり，パブリック・スクールを出て，オックスフォードやケンブリッジで教育を受けていた。1933年にヒットラーがドイツ首相に就任してから，イギリスの若いインテリたちは，まるで熱病のように左翼運動に傾倒していったが，その時にオーデン・グループの若者たちが労働者に感じたのは，自分たちが上流階級の出身者であるという，どうしても否定することのできない「負い目」であったのである。

しかし，オーデン・グループの作家たちが 20 年代の半ば頃に，大学の先

輩や父親に感じていた負い目は，労働者に対するものとは異なったものであった。自らの17歳から24歳までの青春時代について記した，自叙伝的な小説である『ライオンと影』(*Lions and Shadows*) のなかで，イシャウッドが述べているように，それは戦争体験に係わるものであった。

「われわれ20年代半ばの若い作家たちは，みな，多少潜在意識的に，自分たちがヨーロッパ戦争に参加するほど年をとっていなかったという恥辱の思いに苦しんでいた。」(6)

第一次世界大戦が始まった頃には，まだ子供に過ぎなかったこの世代の若者のほとんどは，自分たちの父親や大学の先輩たちが参加した戦いについては，実際に経験することもなく，ただ彼らの勇ましい戦いぶりについて聞くだけに過ぎなかった。戦争に加わることが一人前の大人として認められるひとつの条件であると考えられていた当時の風潮から見れば，彼らがこのように考えていたのも当然と言えよう。戦争を一種のヒロイズムとみなしてきた伝統が，いぜんとして彼らにも浸透していたのである。そして，イシャウッド自身が告白しているように，彼らは，「『戦争』という言葉と結びついた，恐怖と憧れの複合観念にとりつかれていたのだった。」(7)

戦争の本当の残酷さも知らずに，父や兄たちが体験したヒロイズムの世界に憧れていた彼らにとって，戦争体験を先輩たちと同じように味わえなかったという一種の負い目は，30年代を通して彼らの脳裏から離れることはなかったのである。同等な立場で一人前の成長した男として生きていくためにも，彼らには，たとえどんなかたちであるにせよ，伝統的なヒロイズムが必要であった。そして，自分たちよりも一世代前の人々に対する，羨望に満ちた強いコンプレックスの感情を反発のエネルギーとして，彼らは，新しい自分たちの生き方とヒロイズムを模索していたのである。

(3)

まず，30年代の若い文学者たちが彼らの新たな主張の拠り所としたものは政治的なイデオロギーであった。ナチスの台頭とともに，一層コミュニズム的な色彩を帯びていったオーデンの作品，マイケル・ロバーツが編集し，30年代の詩的運動の転機となった『新署名』(*New Signatures*)，政治と詩

の世界のつながりを更に緊密なものと考えた『新しい国』(*New Country*), そして『新しい政治家』(*New Statesman*) などを見れば, 彼らが詩や小説や評論をイデオロギーを表現するための政治的な手段として考えていたことが明白になるのである。つまり, ジュリアン・ベルが述べているように, 「イギリスにおけるコミュニズムは, 現在のところきわめて広範囲にわたって, ひとつの文学的な現象となっている——それは「荒地」から逃げ出すための, 第二の戦後世代のひとつの企てである。」[8] のだった。そして, 30年代前半のイギリス文壇をおおっていた政治的熱狂は, 1936年のスペイン戦争まで続いていったのである。

スペイン戦争の起こった1936年は, 「オーデンにとっては特に忙しい, 多作の年であった。」3月には, GPOの映画部をやめ, イシャウッドとの二度目の共作となる次の戯曲を書くため, 中旬にはポルトガルに向かった。一月にウェストミンスター・シアターで上演された, イシャウッドとの最初の共作, 『犬になった男』(*The Dog Beneath the Skin*) が成功を収めたため, ルパート・ドゥーンとロバート・メドレーに, 再びグループ・シアターのために戯曲を書くように頼まれていたオーデンは, ポルトガルに一ケ月間ほど滞在して, イシャウッドとともに第二作目の完成に精力を傾けていた。そして更に, 6月にはアイスランドに向けて船出をしたのである。ある出版社からの依頼で旅行記を書くことになっていたオーデンは, 出発の6週間後にルイス・マクニースと合流して, アイスランドの荒涼たる自然の風景を見て回っていた。これが翌年マクニースとの共作による, 『アイスランドからの手紙』(*Letters from Iceland*) として出版されるものであった。

9月になってオーデンがアイスランドから戻ると, イシャウッドとの第二作目の戯曲, 『F 6登頂』(*The Ascent of F. 6*) が出版され, 9月25日にはノリッチ・フェスティバルで初演されていた。そして10月には, 新しい詩集である, 『見よ, 旅人よ』(*Look, Stranger!*) がフェイバー社から出たのであった。

このようにオーデンの人生のなかでも, 最も多忙で実りある年を締めくくるかのように, オーデンは, 1936年の12月にある決意をしていたのである。オーデン家と親しい, バーミング大学の教授であった E. R. ドッズ氏への12月8日の手紙において, 彼は次のようにその心境を打ち明けていた。

「新年に本が完成したらすぐにでも出発して, スペインの国際旅団に加

わることに決めました。日常の政治的な活動はあまり好きではありませんので，やりませんが，ここには，作家としてではなく，一市民として私にできることがあります。私には扶養家族もおりませんので，私は行くべきだと感じていますが，むこうにあまり沢山，シューレアリストたちがいないことを願っています。どうかこのことは誰にも話さないで下さい。クリスマスが過ぎるまでは両親にも打ち明けないつもりです。」(9)

セシル・ディ・ルイスやスペンダーほど革新的ではなかったオーデンだったが，この重要な政治的な出来事は，自らの政治的な信念を確かなものとするためには，またとない機会であった。危機の時代に詩人が書くものは，自ら体験したものでなければならないと信じていたオーデンにとって，オックスフォードで得たような学問的な知識だけでは十分ではなかったのである。新しい世代の詩人として，自らの思想を実際に行動に移すことによって，更にそれをより真実のものにすることが不可欠なのであった。

1936年の6月に起こったスペイン戦争は，ヨーロッパの多くの国の若い作家たちに強い衝撃を与えた。多くの若者がフランコ将軍のファシズムと戦うことを志願してスペインに出ていったが，イギリスにおいてもこの気運は最も高まっていたに違いない。彼らの大半はコミュニストであったが，それ以外にも，純粋に自由の抑圧に立ち上がっていったものもいたのであった。ウィルフレッド・オーエンの時代のように，「今日すべての詩人にできることは警告することである。」(10) といった穏やかな言葉では，もはや若者たちを満足させることはできなかったのである。

更に，自由という大義の他に，30年代の若い作家たちをスペインへ駆りたてたものとして，先に述べた，当時の若者たちが先輩や父親に抱いていた，戦争体験の欠如という負い目が挙げられる。少年時代に自分たちが参加することのできなかった，戦争というヒロイズムに憧れていた彼らにとって，スペイン戦争に加わることは，自分たちを，第一次世界大戦を経験した父や先輩そして兄たちと同等の立場に置いてくれるものと思われたのであろう。それゆえ，オーデンが書いた詩のなかでも最も秀れた詩のひとつであると言われる「スペイン」('Spain 1937') においても，確固たる詩人の決意がしばしばリフレインされているのである。

Yesterday the installation of dynamos and turbines;

The construction of railways in the colonial desert;
Yesterday the classic lecture
On the origin of Mankind. But to-day the struggle.

Yesterday the belief in the absolute value of Greek;
The fall of the curtain upon the death of a hero;
Yesterday the prayer to the sunset,
And the adoration of madmen. But to-day the struggle.

きのう発電機やタービンの取り付け，
植民地の砂漠での鉄道の建設，
きのう人類の起源に関する
古典の講義。だがきょうは闘争。

きのうギリシャ語の絶対的な価値に対する信頼，
ヒーローの死とともにカーテンの幕が下りる，
きのう夕陽への祈りと
狂人への崇拝。だがきょうは闘争。

オーデンがスペインから戻ってすぐに書いたこの詩には，スペイン戦争について彼の言いたかったことがすべて表現されており，彼のスペイン戦争へのコミットメントがいかに強いものであったかが示されている。自由の圧殺に向かって立ち上がった民衆に対する詩人の共感が，堅い決意とともに読む人の胸に伝わってくる。戦いという現実のなかに詩人が見たものは，ロマンチックな愛ではなく，死と向き合った人間の極限状態における残酷さであり，野性本能をむき出しにした人間の闘争心であったのだった。そして，オーデンが実際に自分の肌で感じた現実を，いくぶん分析的な，冷静な詩人の眼で描いたからこそ，スペイン戦争における政治的な闘争や，選択に迷う人人の心情が，詩的に浄化されて，より一層鮮明な印象を与えるのであろう。

オーデンは，最初，兵士としてスペインに行くことを望んでいたようであるが，出発が間近になると，野戦病院車の運転士を志願していた。しかし，実際には彼の希望は叶えられず，共和党政府がオーデンに与えた仕事は，彼らの戦争における大義を宣伝して放送することであった。オーデンは，最初の目的の地であるマドリッドに辿り着くこともできず，また，彼の役割もほとんど役に立たないものであったため，きわめて幻滅感を覚えていた。しかし，1月11日のロンドン出発を大々的に新聞などで報じられていたため，オ

ーデンはすぐに帰ることもできず，3月の初めにイギリスに戻るまでスペインに留まらなければならなかったのである。

しかしながら，負傷することもなく生きて故国に帰れたオーデンは，幸せであったのだろう。それというのも，スペンダーやシリル・コナリーのようにジャーナリストとしてスペインで行動していた若者を除いて，多くの志願兵士が，現実の戦いで死んだり深い傷を負ったりしていたからだった。野戦病院車の運転士をしていたベルも砲弾に当たって死に，オーウェルも首をうたれてイギリスに戻っていた。燃えるような熱い政治的信念を抱いてスペインに渡ったオーデンではあったが，現実の残酷な戦争を目の当たりにして，自らの理想がいかに脆いものであったかを認識したのである。

このように，オーデンをスペイン戦争に駆りたてた動機として，戦争体験の欠如と自らの政治的信念を実行に移すという二つのことが考えられるが，この他にもうひとつ大きな動機が彼の行動には秘められていた。スペインへ行く理由を細かく記したドッズ氏宛ての別の手紙において，彼は，「何かもっと大きなことに賭けをする時がやってきたのです。」(11) ときわめて曖昧な口調で述べているが，それは，自らが 30 年代の新しいヒーローのひとりになることであったのだろう。

オーデンのオックスフォード時代の友人たちは，一様に，彼の自信に満ちた，常に意識的に状況を把握していた，リーダーになるにふさわしいような堂々とした態度に圧倒されていたのだった。そして，スペンダーがオーデンと初めて知りあって，オックスフォードのオーデンの部屋を訪ねて詩について論じ合った時，オーデンは，「明らかに彼らは誰かを待っている。」(12) と述べ，スペンダーに対して，自分こそ人々が待ち望んでいる文壇の中心人物になるのだというような雰囲気を見せたのであった。学生時代からすでに，人柄の良さで仲間を引きつけ，30年代にいわゆるオーデン・ジェネレーションという，若い作家や知識人そして芸術家たちのリーダーとなったオーデンにとっては，スペイン戦争は，自分がT. E. ローレンスのような新しいタイプのヒーローになれる絶好の機会に思えたのであろう。

(4)

オーデンを含めて，30年代の若い作家たちにとって最も強い印象を与えたヒーローは，T. E. ローレンスであった。グレイブズの書いたローレンスの

伝記,『ローレンスとアラブ人』(*Lawrence and the Arabs*) によっても知られているように，彼こそは，イギリス人にとっては，伝統的な意味における最後のロマンチックな戦いのヒーローであったに違いない[13]。ローレンスは，オックスフォードを出てから，大英博物館の探険隊に考古学者として加わり，エジプトで暮らし，後に，カイロのイギリス特務機関の一員となっていた。そして第一次世界大戦中は，アラブ人たちをトルコの圧政から解放すべく，またアラブ民族の統一を図って，さまざまなゲリラ活動を行ない，アラブ人を解放に導くと同時に，こつぜんと姿を消したというきわめて謎に包まれた歴史上の人物であった。

身長の低さゆえに軍人になれなかったほど小柄で，内気なインテリではあったが，きわめて行動力にあふれたこの勇敢な人物を，オーデンは，自らの理想とする永遠のヒーローとして憧れていたのである。そして，『演説家たち』(*The Orators*) における飛行士や，『F 6 登頂』のマイケル・ランサムも，ローレンスを心に描きながら生み出されたのであろう。

しかし，ローレンスは，外見的には，伝統的なヒーローのイメージにはふさわしくはなかった。小柄で，神経質なインテリという，典型的なヒーロー像とはおよそかけ離れたひ弱な人間が，あのように勇ましいヒロイズムを生み出したとは，全く信じられないものであったのである。オーデンにとって，ローレンスの姿は，新しい時代にふさわしい新しいヒーローと映っていたのであろう。1934年にローレンスについて書いた文章において，オーデンは，「ローレンスの生涯は，真に弱い人間が，真に強い人間になっていった変容のアレゴリーであり，『自意識過剰な人間はどうしたら救われるのか』という問いに対するひとつの答えである。」[14] とローレンスを分析している。つまり，30年代においては，どのような人間にも新しいヒーローになれる機会が与えられているのだと思えたのであろう。

このオーデン自身の気持ちは，彼が30年代に書いた最も警句的な詩のひとつである[15]，「ドーヴァ」('Dover') にも記されている。

Above them, expensive, shiny as a rich boy's bike,
Aeroplanes drone through the new European air
On the edge of a sky that makes England of minor importance;
And tides warn bronzing bathers of a cooling star
　　With half its history done.

High over France, a full moon, cold and exciting
Like one of those dangerous flatterers we meet and love
When we are utterly wretched, returns our stare:
The night has found many recruits; to thousands of pilgrims
　　The Mecca is coldness of heart.

The cries of the gulls at dawn are sad like work:
The soldier guards the traveller who pays for the soldier,
Each prays in a similar way for himself, but neither
Controls the years or the weather. Some may be heroes:
　　Not all of us are unhappy.

彼らの頭上では，金持ちの少年のバイクのように高価に，きらきらと，
飛行機がうなりをたてて新しいヨーロッパの大気のなかを飛んでいく
イギリスも取るに足らぬものとなる天空のはて。
潮は青銅色に焼けた海水浴の人々に警告する。
　　冷えゆく星が，その歴史を半分終えたことを。

フランスの空高く，冷たく魅惑的に，満月は，
まったくみじめな気分でいるときに，会えば愛らしくなる
危険なおべっか使いのように，僕らの凝視に答えてくれる。
夜には多くの新兵が見つかった。幾千もの巡礼者たちにとって
　　メッカのようなこの町は薄情だ。

夜明けのカモメの鳴き声は，仕事のように悲しい。
兵隊は自分たちに金を出す旅行者を守っている。
どちらも同じようにして自分自身のために祈るが，
歳月や天候は思い通りにはならないさ。ヒーローになるものもいるだろう。
　　われわれは皆，不しあわせというわけではない。

ヨーロッパとイギリスを結ぶ重要な場所であるドーヴァは，社会的にも経済的にも30年代のイギリスの状況を明確に表現してくれる古い港町であった。この国境の町を行き交う，移民や，酒場になだれ込む兵隊たちも，すべての苦労や未来の不安を忘れようとするかのように，大騒ぎをして夜を過ごしている。お互いの利益のために助け合っている兵隊や旅行者たちも，結局は，自分のためにしか祈らない全く平凡な，利己的な人々なのである。そして，このように個人的な人々が，ある時には束の間のヒーローになることもある，何とも予測のつかない時代にオーデンは生きていたのだった。

しかしながら，ローレンスにしても，病んだイギリスを描いたエリオットにしても，オーデンが憧れていた知的でひ弱なヒーローたちは，実質的には

20年代のヒーローでしかなかったのである。オーデンと同世代の行動的な若い作家たちは，誰もが，新しい30年代の自分たちのヒーローの出現を待ち望んでいた。それゆえ，理想に燃えた多くの若い作家たちがスペインに出ていき，フランコ将軍の率いるファシストと戦うことによって，自らの思想的なヒロイズムを実現しようとしたのである。戦いの経験もなかった彼らにとって，実際の戦争は予想以上に過酷なものであったに違いない。彼らの多くが，義勇兵として参加しながら，1，2ケ月もたたないうちに死んだり，負傷したりして故国イギリスに戻ってきたのだった。

実際の戦いに加わることのなかったオーデンでさえも，スペインで経験した戦争の現実のすがたに，表現しがたい強い衝撃を受けてイギリスに帰ってきていた。25年後に，オーデン自身が告白しているように，「見たり聞いたりしたさまざまなことに気持ちが動転していたため，帰国した時，私はスペインのことは話したくはなかった。」[16] のだった。そして，バルセロナの町を歩きながら自分の眼で見た教会の惨状や僧侶たちの嘆かわしい生活の状況に相当なショックを覚えていたのである。

しかし，ヒーローになることのできなかったオーデンにとって，30年代の新しいヒーローと思われる人物がいた。それはE.M.フォースターであった。フォースターも，30年代という危機と混乱の時代が生み出した，新しい特徴を持ったヒーローのように思われたのだった。20年代から30年代後半にかけて，イギリスがヒマラヤのエヴェレストに送り出した登山家のような勇敢なヒーローとは異なった意味でのヒーローであったのである。

オーデンがフォースターと出会うようになったのは，1936年になってからであった。そして，それは，大体，フォースターが避暑地としていたドーヴァでであったが，「中国からのソネッツ」('Sonnets from China') の最後の，フォースターに捧げた21番で，オーデンはいくぶん尊敬の気持ちを込めて次のようにこの偉大な小説家を讃えている。

Though Italy and King's are far away,
And Truth a subject only bombs discuss,
Our ears unfriendly, still you speak to us,
Insisting that the inner life can pay.

As we dash down the slope of hate with gladness,
You trip us up like an unnoticed stone,

And, just when we are closeted with madness,
You interrupt us like the telephone.

イタリアとキングズ・カレッジは，はるか遠くにあり，
真実は爆弾のみで議論される主題で，
僕らの耳はよそよそしいけれども，なおも君は僕らに話しかけては
内なる生命によって償えるのだと主張する。

僕らが憎しみの坂を喜んで駆け下りるとき，
君は気づかない石のように，僕らをつまずかせ，
ちょうど僕らが狂気と密談するときには，
君は電話のように僕らの邪魔をする。

迷える若者たちを憎しみや狂気から救い，あたたかな忠告を与えてくれるような存在としてフォースターは描かれている。若者たちが誤ちを犯しそうになるときにはいつも，彼は思慮深い慈愛に満ちた手を差し伸べて，若者たちに自らの行動を考えさせるのである。真実がどのようなものであるのか，見失われてしまいそうな時代にあって，人間の内的な精神を深く見つめさせてくれるのである。「理性が否定され，愛が無視される」時代であるからこそ，若者は偽りのない正しい道を歩むべきだと説いかけるフォースターの姿は，オーデンと同じ世代の若者にとっては，まさに彼らが待ち焦がれた「誰か」と映ったのも全く不思議なことではなかった。

20世紀初頭の小説の世界で，物質主義に依存した現代文明を痛烈に批判したフォースターは，その思想小説のなかで，現実の社会に生きる人々の肯定的な人間関係を描こうとしていた。しかし，1924年にイギリスのインド支配のありのままのすがたを伝え，同じ人間同士の理解と結びつきの難しさをテーマとした，『インドへの道』(*A Passage to India*) を発表してから，彼は長篇小説の世界から遠ざかり，30年代には，評論や講演そして放送などの分野で活動しながら，自らの理想の実現に向かっていたのである。

何かしなければいけないと感じながら，不安や恐怖感のために決心することのできなかった若者たちにとって，フォースターは，彼らが待っていたローレンスのような新しいタイプの ヒーローに思われたのだった。『演説家たち』のなかでなされたあの有名な問いかけ，「君はイギリスを どう思うか，誰もが健康ではない，われわれのこの国を？」に対して，自信と勇気と行動力をもって答えることのできる インテリが，フォースターであったのである。そして，30年代が終わりに近づき，戦争の影がイギリスにも忍び寄って

くるにつれて，30年代の作家たちのなかでもフォースターが，知的なヒーローとみなされ始めていた。

ローレンスと同様に，フォースターは，内向的で，知的で，しかも行動的な人間とは全く思われないようなはにかみやであった。しかし，彼には，若い世代の作家たちを引っぱっていく行動力があったのである。1935年にパリで開かれた，コミュニストたちの，文化を擁護するための国際作家協会の会議で，自らの自由の信念を宣言したり，1938年には，ブルームズベリー・リベラリズムの宣言書と言われるようなエッセイを書いていた。このようにリベラリズムを守るために立ち上がったフォースターが，30年代後半に書かれた多くの若い作家たちの本のなかで，取り上げられ，賞讃されたのも，彼が果たした指導的な役割から見れば当然のことであったのである。

しかしながら，新しいタイプのヒーローとみなされたフォースターではあったが，彼は，いわゆる伝統的な戦いのロマンチックなヒーローでも，オーデンと同世代の若者のなかから生まれた若いヒーローでもなかったのである。30年代の急進的な若い作家たちにとって，確かに彼は，勇敢なリーダーではあったが，ローレンスほどのヒーローにはなりきれなかったのである。そして，30年代の後半になると，真のヒロイズムを探究し続けていた若者たちにも，新たな変化が生じてきたのであった。

(5)

オーデン・グループのなかで，最初にこの新たな変化を示したのは，オーデン自身であった。マクニースのように，オーデン・グループにありながら，政治的な運動に一切係わりを持たず，独自の道を歩み，文学の世界に政治の介入を認めることのなかった，きわめて孤立した詩人もいたが，オーデンを含めて同時代の若い作家たちにとって，政治的な活動こそが，彼らの主義や主張を実践に移すことのできる唯一の場であると思われたのだった。それゆえ，1936年から1937年にかけて，ヨーロッパやアメリカから若者たちがスペインに出ていき，ファシズムとの戦いにその純粋な情熱を燃やしたのである。

デイ・ルイスやスペンダーのように，共産党のメンバーになるほど深く政治との係わりを持つことのなかったオーデンにとっても，スペイン戦争がひとつの大きな転換点であったことは確かであった。衝動的なヒロイズムから

共和政府軍の支援に駆けつけたオーデンではあったが，現実の戦争を目の当たりにして，自らの無力を思い知らされたのだった。そればかりではなく，破壊された教会や，僧侶たちの無残な状態が，オーデンの心にキリスト教の精神の大切さを再び刻みつけていたのである。スペインでのヒロイズムを探究する旅によって，結局オーデンが得たものは，長詩「スペイン」やキリスト教への回帰，更には，政治的な運動からの撤退であった。

オーデンは，衝動的にマルキシズムに傾倒していく過程で，現実にその理論が，スターリン支配のロシアでどのように実践されているかを認識し，大きな失望を覚えていたのだった。そして，スペイン戦争で受けた強烈なショックによって，自らの政治的熱情の未熟さと虚しさを思い知らされたオーデンは，しだいに政治的な活動から遠のいていくのであった。

30年代前半に「個人主義」を捨てて，コミュニズムに走っていった，若い作家たちは，政治との係わりによってはいかなる真の芸術も生まれることはないのだということに気づき，スペイン戦争を契機として，コミュニズムに対する彼らの熱狂的精神もさめていったのである。オーデンに続いて，スペンダーも1937年には，『リベラリズムからの前進』(*Forward from Liberalism*) において，「コミュニズムへの自らの個人的な態度」を明らかにし，また，オーデン・グループのなかで最も熱心なコミュニストであったデイ・ルイスも，1937年か1938年に開かれた集会において，「ここは詩人がいる場所ではない。」[17] ということを自覚して，党の活動的な地位から去っていったのである。

このように，30年代後半になって，来るべき戦争が暗雲をイギリスの国土にも投げかけ始めた時，オーデン・グループの若い作家たちは，政治的熱狂からさめて，社会における自らの役割と存在を探求する新たな活動へと，その若い情熱を傾けていったのである。オーデンにとっても，伝統的な意味におけるヒロイズムは，ついには実現されないままに終わり，第二次世界大戦が現実にイギリス人の生活に無関係なものとは思われなくなるにつれて，オーデンの理想的なヒロイズムも，暗い戦争の悲劇へとのみ込まれてしまっていったのである。そして，1938年の1月19日に，オーデンはイシャウッドとともに，その当時，日本軍に侵略されていた中国に向けて，ドーヴァから，新たなヒロイズムを求める「戦争の旅」に船出をしたのであった。

〔註〕

Text は W. H. AUDEN; *COLLECTED SHORTER POEMS 1927-1957* (Random House, 1966) と *THE ENGLISH AUDEN* ed. by Edward Mendelson (RANDOM HOUSE, 1977) を使用した。

(1) Charles Osborne, *W. H. AUDEN The Life of a Poet* (EYRE METHUEN, 1980), p. 54.
(2) Ibid.
(3) Charles Osborne, *op. cit.*, p. 55.
(4) Ibid., p. 37.
(5) Samuel Hynes, *The Auden Generation* (FABER, 1979), p. 58.
(6) Ibid., p. 323.
(7) Ibid., p. 21.
(8) Ibid., pp. 129-130.
(9) Charles Osborne, *op. cit.*, p. 129.
(10) Samuel Hynes, *op. cit.*, p. 22.
(11) Charles Osborne, *op. cit.*, p. 130.
(12) Ibid., p. 49.
(13) Samuel Hynes, *op. cit.*, p. 190.
(14) Ibid., p. 191.
(15) リチャード・ホガート『オーデン序説』岡崎康一訳，晶文社，1974年，p. 88.
(16) Charles Osborne, *op. cit.*, p. 134.
(17) Samuel Hynes, *op. cit.*, p. 263.